

中一国語

坊っちゃん 第三回

講師・・羽場雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・坊っちゃん



◆ 夏目漱石

東京帝国大学（今の東京大学）英文科卒業後、
東京高等師範学校、松山中学、第五高等学校な
どの教師生活を経て、イギリスに留学する。

〈代表作〉

『吾輩は猫である』…第一作

前期三部作…愛とエゴイズムの追求

『三四郎』

『それから』

『門』

後期三部作…修善寺の大患後、心理主義的・実
存主義的関心が深まった作品

『彼岸過迄』

『行人』

『こころ』

『道草』…自伝的小説。

『明暗』（大正五年・未完）…絶筆

おれが下宿へ帰ったのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆ばあさんが驚おどろいて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥おくさんを連れてくるんだと答かえて勘定かんじょうを済まして、すぐ汽車へ乗はって浜へ来て港屋へ着くと、山嵐あらしは二階で寝ねていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有これあり之辞職の上東京へ帰り申候もつしそろにつき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛あてにして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつぱんである。山嵐もおれも疲つかれて、ぐうぐう寝ね込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女じゆんに巡查は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野うっただも訴うえなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄ふじょうな地を離はなれた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆しやばへ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢あう機会がない。

清きよの事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴かばんを提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙なみだをぼたぼたと落した。おれもあまり嬉うれしかったから、もう田舎いなかへは行かない、東京で清とうちを持つんだと云いった。

その後ある人の周旋しゅうせんで街鉄がいてつの技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関げんかん付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎はいえんに罹かかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つておりますと云った。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

【第一問】

夏目漱石について説明した次の文章の空欄^{らん}に当てはまる言葉を、後の語群から選び、記号で答えなさい。

夏目漱石は、東京帝国大学英文科講師となるが、神経衰弱^{すい}を再発させた漱石は高浜虚子^{すず}に勧められ、第一作の小説「(1)」(明治38年)を発表。その後、松山中学での経験をもとに書いた「(2)」、「草枕^{まくら}」、さらには前期三部作「(3)」「それから」「門」を執筆^{しつぴつ}する。

「語群」

ア、ドイツ	イ、イギリス
ウ、坊っちゃん	エ、吾輩は猫である
オ、行人	カ、三四郎
キ、明暗	ク、修善寺の大患

1 || **エ**

2 || **ウ**

3 || **カ**

【第二問】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、^①学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やあい。とはやしたからである。人に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

(中略)

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖くせのように云っていた。何が駄目だめなんだか今に分らない。妙みょうなおやじがあつたもんだ。兄は、実業家にな

るとか言つて、しきりに英語を勉強していた。
(中略) ある時将棋をさしたらひきよくな待ち
駒をして、人が困るとうれしそうに冷やかした。
あんまり腹が立ったから、手にあつた飛車を
眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて少々
血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじが
おれを勘当すると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云
う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し
使っている②清という下女が、泣きながらおや
じに謝まつて、ようやくおやじの怒りが解けた。
それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思
わなかつた。かえつてこの清という下女に気の
毒であつた。この下女はもと由緒のあるもの
だつたそうだが、瓦解のときに零落して、つい
奉公までするようになったのだと聞いている。
だからばあさんである。このばあさんがどうい
う因縁か、俺を非常に可愛がつてくれた。不思
議なものである。母も死ぬ三日前にあいそをつ
かした——おやじも年中持て余している——町
内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする——
この俺を無暗に珍重してくれた。俺は到底人に

好かれるたちでないときらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審しんに考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたはまっすぐでよいご気性だ」と褒ほめることがときどきあった。しかし俺には清の言う意味が分からなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれらるだろうと思つた。清がこんな事を言うたびに俺はお世辞は嫌きらいだと答えるのが常であつた。するとばあさんはそれだからいいご気性ですと言つては、嬉しそうに俺の顔を眺ながめている。自分の力で俺を製造して誇ほこつてるように見える。少々気味が悪かつた。

(中略)

清きよの事を話すのを忘れていた。——俺が東京へ着いて下宿へも行かず、革靴かばんを提げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙なみだをぽたぽたと落した。俺もあまり嬉うれしかったから、もう田舎いなかへは行かない、東京で清とうちを持つんだと云いつた。

その後ある人の周旋しゅうせんでの街鉄がいてつの技手ていずになつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関げんかん付きの家でなくつても至極満足しごくまんじつの様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎はいえんに罹かかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云つた。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

問一 傍線部①「学校の二階から飛び降りて」とあるが、「俺」がこのような行動をとったのは、彼のどのどのような性格によるものか。文章中から二文字で抜きだしなさい。

無鉄砲

問二 傍線部②「清」について。この文章からは「清」の「俺」に対するどのような態度が読み取れますか。簡単に答えなさい。

とても愛している態度／
溺愛している様子